

通 信



日 仏 東 洋 学 会

日 仏 東 洋 学 会

事 務 局

〒162 東京都新宿区戸山 1-24-1 早稲田大学文学部
福井文雅研究室 Tel. 03.203.4141.

通信編集委員（五十音順）

興 膳 宏， 高 田 時 雄， 中 谷 英 明， 羽 田 正
浜 田 正 美， 御 牧 克 己， 八 木 徹

入会申し込み・会費納入（年会費 3,000円）

〒113 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学東洋文化研究所
羽田正まで Tel. 03.812.2111.

『通信』の記事

〒651-21 神戸市西区伊川谷 神戸学院大学人文学部
中谷英明まで Tel. 078.974.1551. / Fax. 078.974.5689

目 次

ニュース

新会長に福井文雅氏、代表幹事は興膳宏氏 2

国際会議

第33回 ICANASに参加して(福井文雅). 4

第8回国際サンスクリット会議コンピュータ部会 . . . 6

フランス便り

『インド文明研究所報』の発刊 6

フランス書

新刊紹介: リ・ヒジェ『15世紀韓国の活字印刷』. . . 7

最新号の目次: Journal Asiatique / T'oung Pao . . . 7

フランスからの来日

ジェルネ氏日本学士院客員に 14

ジェルネ氏講演 15

会員消息

大地原豊氏フランス学士院客員会員に 16

渡仏記「フランスで暮らした九ヶ月」坂出祥伸 . . . 16

受賞・会員出版物・新入会員・住所変更・その他 . . 19

報告

平成元年度会員総会 20

日仏シンポジウム準備状況 23

日仏東洋学関係者懇談会 25

学術会議に再登録 26

編集後記 27

新会長に福井文雅氏

代表幹事には 興膳宏氏を選出

本会会長榎一雄氏は、既報の通り、昨年11月に急逝された。これに伴い、本年3月の会員総会に於て、早稲田大学文学部教授福井文雅氏（中国哲学）が新会長に選出された。福井教授は、去る昭和58年7月の本会再建総会以来、代表幹事として長らく事務局の仕事を势力的にこなして来られ、本会発展に多大の尽力を惜しまれなかったことは、周知のとおりである。

また新代表幹事は、京都大学文学部教授興膳宏氏（中国文学）がお引き受け下さった。同教授は従前より関西西部会の責任者として、関西における活動の中心となってこられた。お二人を軸として本会の活動が益々活発になることが期待される。

新会長福井文雅教授からは、次のご挨拶をお寄せ頂いた。

就任ご挨拶

一日仏東洋学会の役割

福井文雅

この度図らずも、と言うのがこういう場合の決まり文句ではありますが、正直、それが実感です。会長と言う余りにも身に過ぎた大役に推挙戴きました時には、実際、どうしたら良いやら判らず、去就に悩みました。なにしろ本学会は会員がバラエティに富み、各分野の第一線で、また責任者として御活躍の方々が多いことで有名なのです。他方、会長は、初代が石田幹之助、二代辻直四郎、三代榎一雄と言う当代一流の方々ばかりでした。私は確か1959年には既に日仏会館の事業に関係するようになっていたのですが、それ以降、不思議な縁で、この三先生にはお世話になりました。

こういう会員や先代会長を前にしては、学徳共に薄い私が大いに困惑したことはお判り戴けるかと思えます。当時主幹（事務局長）であった私には、別に心当たりの方々はいて、立場上打診もしたのですが、色々な理由から実現しませんでした。

ただ逆に考えますと、これだけ多くの立派な会員諸氏がおられると言うことは、それだけ多くの御意見が戴けると言うことです。また、私が先代までの諸会長の真似をしても始まりません。そう考えて、「今までのようで宜しければ」と言うことで、お引受けした次第です。有難いことに、興膳宏京都大学教授が代表幹事を引き受けて下さいました。

こう言う重責は、会員諸賢の御協力、御後援が有りませんと果せるものではありません。何卒宜しくお願い申し上げる次第です。

下手な御挨拶をしますよりも、新入会員も増えたことですので、この機会に、改めて本会の果すべき役割を振り返っておきたいと思えます。

その第一は、発足以来、フランスとの「窓口」「架け橋」の役を務めることにあります。そこが他の東洋学関係の学会と大いに違う点です。

フランスから東洋学者が初来日して必ずぶつかる問題は、「どのようにしたら日本の学界と接触出来るのか、この問題についての日本人の業績はどこに行ったら入手出来るのか、どこへ行ったら訪日の目的は達せられるのか」といった問題です。手探りで、又は、専門外の人に尋ねて、無駄な努力を重ね、間違った方向に進む人々も少なくありません。その結果、日本の学界について間違った報告がフランスの学界になされる場合さえあります。これではお互いの損です。

逆に、これからフランスに勉強または研究に出かける日本人についても同様のことが起こります。フランスの研究・教育制度と、その中の東洋学の組織は中々理解しがたいものがありますから、滞仏の経験者に尋ねるに超したことはありません。

その様な両方の問題解決の場合に、本会は「窓口」となってお手伝いをするわけです。その為の人

材には、本会はこと欠きません。

第二には、フランスとの学术交流の仲介役です。その一例として、東洋学が日仏コロックへ参加する時の母体になるのも、本会の主要な仕事です。

その他、日仏間の共同研究計画や日仏間の研究者・学者交換、渋沢・クローデル賞への応募等々、本会が交流の場になる機会は多くありますので、(毎年のように『通信』に公示して来たことですが)会員諸氏は大いに活用してください。

本会の役割は、実はフランスとの架け橋だけに留まりません。学問の国際化に伴って、諸外国とフランスとの間の「窓口」、橋渡しの役をする場合もあります。実際に有った話ですが、アジアの某国研究機関が世界宗教会議を開催する案を立てた時、フランスの学界事情が良く判りません。そこで、本会宛てに問い合わせが来たのです。

二

そこで私の役目ですが、第一には、本学会の存在と特色とを、もっと広く内外に知って貰うように努力することかと思えます。仏教界には「全日本佛教会」と言う大きな組織があり、略して「全日佛」ですが、それと本会とは良く混同されるのです。幸いにも、宗教界の情報紙としては日本最大の『中外日報』が、最近しばしば本学会の活動を報道してくれています。お蔭で、宗教界には存在が知られるようになり、韓国の車柱環博士(中国文学、道教学・敦煌学会長)からも連絡がありました。

第二に第一と連携して来ることですが、他の学会や公私諸機関との協力態勢の確立です。それが出来ておりませんと、来日するフランス人研究者の受入れが充分には出来ません。その意味では、今回ジェルネ博士の講演に財団法人東方学会が極めて好意的に共催してくれましたことは、画期的な出来事ではなかったか、と(本学会の歴史を長年眺めて来ました)私には思われるのです。ここに一々名は挙げませんが、以上挙げた他にも、既に幾つかの研究・報道・出版機関から好意的な協賛の約束を得ています。東方学会を始めとして、それらの機関に逆に本会が協力する場合も生じますが、相互の協力関係は

今後とも続けていきたいものです。

最後には、私一人でなく、全会員の課題になることとして、会員の増加の仕事があります。会員が多ければ、それだけフランスの学界との交流に当って、また我々同士の間でも、多くの、且つ正確な情報を得ることが出来るようになります。

日仏東洋学会と言う名前から、会員はフランス語に堪能でなければならぬかのように思って、入会を渋っている方々がいることは、大変残念なことです。前回の日仏コロック・第一部会で、「これは日・仏コロックなのだから、日本語を使っても良いのだ」と言い出したのは、他でもない、フランス側だったのです。実際、フランス語が出来なくても、コロックで活躍する会員は多くいました。会則にも「本会の目的は東洋学に携わる日仏両国の研究者の間に、交流と親睦を図るものとする。」とあって、フランス語が出来なければ会員にはなれない、などとは何処にも書いてありません。

入会して戴いた方々にとって、本学会が居心地の良い、有効な学会であって欲しい、と私は願うものです。東洋学は領域が多く、様々なのですが、それだけに、その間に如何なる意味においても不均衡があってはならない、と(これも従来代表幹事としての経験からも)留意しています。特に会長職にあっては先代の方々を見習い、広く見渡して不公平が起こることの無いように努力するつもりです。

三

フランスとの「窓口」としては、この『通信』の持つ意味は極めて重大になります。特定の年次学術大会などは開かない本会としましては、この発行こそが主要活動なのです。

日本の東洋学では、それぞれの分野で既に専門の機関誌が発行されていますので、改めて本会の為のBulletinなどを創刊する必要もあるまい、と言う大方の意見から、この『通信』は専ら日仏の東洋学界の情報交換を目的にしています。その目的の雑誌は、実は他には無いはずですので、本『通信』の意義は大きいのです。この編集・発行に当ってられる関西西部会の方々には、会を代表して、心から御礼申し

上げねばなりません。

以上、この欄を借りて御挨拶代わりに学会の役割を長々と述べましたが、これもまた、他の学会と違って、直接に会員諸氏に訴える機会が少ないからに他なりません。

会長としての最大の役目は、必要な時には決断を下す、そして、その責任は取ることにあり、とは世上良く言われることです。その点は心して行きたいと思しますので、繰り返すようになりますが、会員各位の御協力を切にお願い申し上げる次第です。

ふくい・ふみまさ (備名でブンガ) FUKUI Fumimasa -Bunga 1934 年、東京 (新宿区) 生れ。早稲田大学文学部・教授。中国宗教・思想史専攻。早稲田大学文学部東洋哲学専修、「アテネ・フランセ」フランス語課程卒業。1961年 9月～64年 8月フランス政府給費留学生。フランス国立高等研究院 (E. P. H. E.) 宗教学科 titulaire。Paul Demiéville, R. A. Stein, M. Kaltenmark の三教授に師事。日本中国学会・日本道教学会・天台学会、各理事。財団法人東方学会・日本印度学仏教学会・東大中国学会、各評議員。日仏会館学術委員会・密教図像学会・ICANAS 日本国内委員会、各委員。Société asiatique (フランス・アジア協会) 会員、その他。日光山輪王寺 (天台宗) 唯心院住職、勸學院出仕者。著述として *Religions du Japon* (1966, Librairie Bloud & Gay, Paris), 『般若心経の歴史的研究』 (博士論文。春秋社, 1987年 2月) その他。

国際会議

第 33 回 I C A N A S に参加して

福井 文雅

かつての所謂「国際東洋学会議」のことである。しばらく C I S H A A N の名称で通っていたが、現在はこのイカナスの略称になっている。

今回はカナダのトロント市で、トロント大学を会場に 8 月 19 日から 25 日まで開催された。参加国は 49 ヶ国に上り、参加人数は 1100 人余であった。総合テーマは「諸文化間の接触」であった。

日本からは、この国際会議の世界的連絡機関である Union の副会長である山本達郎教授御夫妻、Icanas 日本国内委員からの神田信夫、高崎直道の両氏と私の他、各種研究者三十人余りと、東方学会の事務局から柳瀬廣、山口博邦の二氏が参加した。日仏東洋学会からは、上記五名と共に、栗原圭介教授御夫妻、湯山明教授、吉田敏行が出席し、学生である吉田を除いて全員が研究発表を行った。平川彰、金谷治、京戸慈光の三会員は欠席。本学会関係のフランス側参加者は Cartier カルチエ、Kalinowski カリノウスキ、Lafont ラフォン、VAN-DERMEERSCH ヴァンデルメルシュの四氏であった。

会議の全体像と部門別の詳細は『東方学会報』No. 59 に近く載るので、ここでは、本学会に関係して、フランスに関する所感を主に述べおきたい。

第一は、国際会議でのフランス語使用率の減少である。周知のように、カナダは bilingue 二ヶ国語併用の国家である。しかし、それは建前上の、政治上の話であって、現実には英語にかなり浸食されつつあった。実際に行ってみると、ケベック州独立問題も理解出来る。トロントの飛行場受付でさえ、たどたどしいフランス語であったので、その後私は英語で通さざるを得なかった。

会議そのものも、建前は英語、フランス語が公用であり、要旨も両用であったが、現実には英語使用が殆どであった。オランダでヨーロッパ中国学会議が開かれるのと時期が重なって、ヨーロッパの学者の参加が少なかったのも、尚更その印象が強かったのかも知れない。会場はカナダではあっても国際会議なのであったから、それが当然であったのかも知れないが、今後フランス語だけの発表は益々減るであろう。

フランス人の発表も、私が聴いた限りでは、ピジョー女史を除いて全員が英語を使用していた。私は要旨も発表原稿もフランス語で書き、呑気に構えて

いたのであるが、ヴァンデルメルシュから「英語で話した方が良い」と忠告され、会期も半ばになった或る日の夕方、時間を割いて英語に書き直して発表した。お蔭で10ばかり質問が出たが、これがフランス語であったならば、少なかったに違いない。

とは言え、その傾向は学術的にフランス語が必要になりつつあることを意味するものではない。むしろ逆に、学界の現実、フランス語習得の必要性、重要性を示しているのではないか、と言う印象を強く抱いて私は帰国したものである。

その理由は『東方学会報』No. 59 にも書いたが、要するに、洋の東西を問わず、フランスの学問の伝統に学ぶべき点はまだまだ有る、と言うことである。

これは決して手前味噌で言っているわけではない。『東方学会報』の読者でない会員の為に、要点のみをここに抄録するならば、次のようになる —

第一は、概念規定・定義の重視である。フランス人は、何かを議論しようとする時には、先ず定義からはじめようとする傾向が強い。話が少し混み入ると、冗談の時でも、*Definissons*。(定義しよう!) と言うのを、フランスに留学した人ならば多少とも聴いたことがあるに違いない。そして、その定義からの論理の展開には独特のものがあって、中々我々(と言っては語弊があるならば、私)には真似の出来ない点がある。

その「定義」が、今回の会議では少なかったようである。特にそのことは、パネル、シンポジウムで痛感した。実は、パネルのテーマには「前近代における東アジアの教育」とか、「日本文化はユニークか？」などと良いテーマが多かったにも係わらず、実際に始まってみると、聴衆の多くはその進行にガッカリした。期待はずれの原因は、問題提起の趣旨とテーマの概念規定とが、最初にハッキリと説明されなかった点にあった。それが為に、話題が分散してしまっ、議論は分析や問題解決でなく、概論に墮する場合が多かった。

従って、そこにフランス人研究者が加わると、彼ら独特の方法論で問題の核心が明らかにされる場合が度々あって、伝統の重みを感じさせられた。例え

ば、21日の「東アジア文学における“古典”の概念」のパネルがそうであった。そこでフランスの日本学者、ピジョー女史が示した方法と分析とは、実に見事であった。他の学者は『日本古典文学大系』に入っている“古典”の書物を使って議論を展開したのであるが、彼女は、先ず「古典」の日本古代の定義から始めて、日本文学の古典とは何か? を分析して見せたのである。さすがに *sévrienne* (男子の秀才 *normalien* の対語。フランスは男女別学) だけのことはある、と感心したものである。

前述のような理由から、今回欧米人中国学者の参加は少なかったが、しかし、小數ながら参加したフランス系学者の発表内容を見ると、彼らが今回の会議開催にはかなり貢献していたようである。幾つかの重要なパネルは *Joint Committee on European-American Exchanges* 「欧米交流合同委員会」の企画で、中でもフランス人の参加が多かったのである。唯、司会者がフランス人で無かったのが惜まれる。

実は、幾つかのパネルへの参加を私は誘われたのであるが、余りにも時間が切迫していたのと、テーマの設定理由が判らなかったので、消極的な返事に留めて、実際には参加しなかった。

第二は、中国宗教研究の場でのフランス語の重要性である。その研究はフランス語で書かれるのが多い。「従って、その研究にはどうしても日本語とフランス語との知識が必要だ」とは中国人自身の言葉である。事実、若手中国人研究者は参考文献に日本、フランスの研究を挙げていた。

因みに、昔とは違って、若手中国人研究者がそのように諸外国の研究にまで眼を配るようになっていた現状は極めて印象的であり、日本人も世界の学界の進歩に一層目を広く向けなければ、独り取り残されて、時代遅れになる、の感を深くさせられた。

日本人は(又は中国人は)横文字の文献は読まなくて良い、と言うことが今だに言われる。耳に入り易い意見ではあるが、しかし、それは一を知って二を知らない意見、しかも昔の話である。何故ならば、そういう態度でいると、欧米人が既に発表している優れた研究を知らないで、それよりも劣った発表を

する結果になり兼ねないからである。国際会議と言う他流試合で、日本人研究者が中国の亜流にならず、況んや欧米に遅れをとることなく、どのように独自性を、存在意義を出せるのか？ が問われている時代が来ていることを、改めて痛感させられた。

次の開催校は香港大学である。この東洋学会議はパリで、1873年に開かれたのが最初であった。その意味でも、本学会とは縁が深い。日仏東洋学会の会員諸氏の参加が、大いに望まれるところである。

国際会議

最近コンピュータ事情

標準アスキーコード決まる

— ウィーン・第八回世界サンスクリット会議 —

中谷 英明

サンスクリット文献処理のためのコンピューター利用は、近年いよいよ盛んになりつつある。本年8月27日から9月2日に、ウィーンで開催された「第八回世界サンスクリット会議」(VIIIth World Sanskrit Conference)においても、コンピューター利用に関して二つのパネルが開設され、本会からは、高崎直道、原実(東京大学)、湯山明(国際仏教学研究)、徳永宗雄(京都大学)、矢野道雄(京都産業大学)の各氏らが熱心に参加された。特筆すべきは、年来の懸案であった、弁別記号付き文字のアスキーコード割当に関する申し合わせが、今回急転直下実現したことである。

* * *

R. E. Emmerick 教授(Hamburg 大学)の主宰になるパネル「データ互換のためのサンスクリットの標準化」において、Wellcome Institute(London)のD. Wujastyk氏は、研究者間で不統一になっている、弁別記号付き文字のアスキーコードへの割当を標準化することを提案された。この提案をうけて、ただちに小委員会(Emmerick, Falk, Larivière, Meulenbeld, Wujastyk, 徳永、矢野、中谷)が組織され、暫定案が採択された。

それは、古典サンスクリットに必要な文字は、大文字・小文字共に224番以降に割当て(但し225番のベータは独語の β として使用されるので外す)、ヴェーダ語、中期インド語は、アクセントや母音の長短記号付き文字も含めて128番から223番の間に適宜振り当てたものである。またタミール語も考慮され、2文字が付加された。チベット語は考慮しない事となった。詳細は、筆者が『印度学仏教学研究』(平成3年発行)に報告したので参照されたい。

この案は、あくまで暫定的なものであり、修正提案があれば、Wujastyk氏または筆者まで寄せられたい。必要な修正を付した後、国際サンスクリット学会事務局から各国研究者にまもなく通知される予定である。

今後この方式によって入力されたデータは、変換プログラムなしに直接交換可能となり、非常に利便が期待される。なお既存データの交換に関しては、H. Falk氏(Freiburg 大学)が、自身で開発された変換プログラム(IBM用)を各国研究者の利用に供することを申し出られた。

フランス便り

『インド文明研究所報』 発刊される

コレージュ・ド・フランスのG. FUSSMAN教授は、1990年9月付けで、主として外国人研究者に宛てた「LETTRÉ D'INFORMATION DE L'INSTITUT DE CIVILISATION INDIENNE」を発刊された。14頁からなる第1号は、次の項目を含んでいる。なお、英語のタイトルは、英訳が添えられている項目である。

1. Éditorial.
2. Cours et Conférences du Collège de France (1989-1990).
3. International Seminar.
4. The Library.
5. A list of indological books published in France (1989-1990).

6. Indological papers printed in the main French Oriental Journals (1989-1990).

1. Editorial は、『所報』発刊の事情、1928年 Émile SENARTによって創立されて以来のインド文明研究所の歴史、その現在の機構と活動などを詳述する。

2. はコレージュ・ド・フランスのインド学関係諸講義一覧(客員教授による講演を含む)。

3. は1991年秋、パリで開催予定の日仏シンポジウムの予告(本誌23頁参照)。

4. 印度文明研究所付属図書館の利用詳細。

5. 及び6. の書誌は、本誌にそのまま載録することとする(本誌9頁以下参照)。

最近1年間のフランスにおけるインド学関係の主要活動がすべてわかり、外国のインド学者にとって至便のガイドとなっている。取り寄せ希望者は、

DIFFUSION DE BOCCARD,

11 rue de Médicis, 75006 Paris

まで申し込まれたい。

フランス書

フランス書新刊紹介

高田 時雄

リ・ヒジェ 『15世紀韓国の活字印刷』

Hee-Jae LEE, *La typographie coréenne au XVe siècle*. Paris: Editions du C. N. R. S., 1987, XXV+209pp., 120F.

韓国には印刷史上に誇り得べき遺産が三つある。第一は七世紀前半に遡ると見られ、現存する世界最古の印刷物「無垢浄光大陀羅尼經」であり、二は善本の誉れ高い「高麗大藏經」、そして最後に本書の主題である世界最初の金属活字印刷である。活字は北宋時代に畢昇が粘土に膠を混ぜたものに字を刻し、それを焼き固めて作ったのが最初とされるが、金属活字による印刷が大量かつ精巧に行われるようになったのは15世紀の韓国においてであった。あたか

も西方でグーテンベルクが活字印刷を開始する時期である。それ以前に印刷術をもたなかった西方世界と、すでに長い整板の歴史を有した東方とでは、活字印刷が社会に与えた影響の度合いを云々することは初めから無理である。しかし李朝の活字印刷が東アジアの印刷史上における画期的な発展であったことは疑いを容れない。その得失と最終的収支については検討してみる必要がある。

本書は活字印刷の絶頂期15世紀に焦点を当てて韓国活字印刷史を描写しようとする。その記述するところは諸種の活字鋳造の紹介から、印刷を司る役所の歴史的変遷はもとより、紙・墨などの印刷素材、製本の技術や様式にまで及ぶ。豊富な図版(35枚)もテキストの理解を助けるのに十分である。韓国では活字印刷について数多くの書物が発行されていて、深く研究しようという向きには参考書に事欠かない。ただヨーロッパでは恐らく本書が最初の専著であろう。専門にわたる詳細な記述を求めるのは無理としても、ヨーロッパ人向けのこのような書物の方が我々一般読者にとっては韓国活字印刷史の概観を得る上でかえって便利だということもあるのである。

構成を示すため目次を訳載すると、次のようである。

第1章：癸未字(1403)の出現

第2章：世宗時代の活字

第3章：15世紀後半の活字

第4章：活字印刷の技術

第5章：韓国の印刷術に関する試論

最後に、本書にはすでにギメ美術館の Francis Macouin氏による簡明な紹介があることを付記しておく(*Arts Asiatiques*. Tome XVIII, 1988)。

フランス書

最新号の目次

— フランスの雑誌から —

1. *Journal Asiatique* (御牧克己)
2. *T'oung Pac* [通報] (高田時雄)

Journal Asiatique

Tome CCLXXVII, 1-2 (1989)

論文

- H. Hugonnard-Roche, Aux origines de l'exégèse orientale de la logique d'Aristote: Sergius de Res'aina (1536), médecin et philosophe. (アリストテレス論理学の東洋的注釈の起源: レシヤイナのセルギウス (1536)、医師=哲学者)
- M. bazin, L'habitat rural dans la vallée de l'Euphrate à l'est de Malatya (Turque). (トルコ、マラティヤ東のユーフラテス川流域村落居住形態)

B. Brac de la Perrière, L'histoire des neuf kharuñ: un recueil de textes administratifs birmans du 18ème siècle. ('九カルイン' 区画の歴史: 18世紀ビルマ行政文書集成)

S. Mauclair, Collectivités et maisons dans la civilisation japonaise traditionnelle. II. Sur le concept de uji. (伝統的日本文明における集団と家, II. 氏 の概念)

M. Debergh, Une carte oubliée du P. Ferdinand Verbiest (1674) dans la collection Sturler de la Bibliothèque Nationale de Paris. (パリ国会図書館所蔵 Sturler コレクション中の従来未注目の Le P. Fernand Verbiest の地図 (1674年作成))

Journal Asiatique

Tome CCLXXVII, 3-4 (1990)

論文

- D. Lion-Goldschmidt, En souvenir de Madeleine Paul-David. (Madeleine Paul-David 追悼記)
- D. Gimaret, Cet autre théologien sunnite: Abū l-'Abbās al-Qalānisi. (もう一人の回教神学者 アブー・アルアッバース・アルカラニシー)
- Ph. Ramirez, Esprits ennemis, esprits alliés: la cosmologie politique des sociétés de l'Arunachal Pradesh, Inde. (敵と味方: インド、アルナチャルプラデシュの諸社会の政治的宇宙創成

論)

- B. Brac de la Perrière, L'histoire des neuf kharuñ: un recueil de textes administratifs birmans de 18ème siècle (deuxième partie). ('九カルイン' 区画の歴史: 18世紀ビルマ行政文書集成 (II))
- K. Buffetrille, La restauration du monastère de bSam yas: un exemple de continuité dans la relation chapelain-donateur au Tibet? (サムエ寺の修復: チベットの"導師-施主" 関係の継続の一例?)

Journal Asiatique

Tome CCLXXVIII, 1-2 (1990)

論文

- B. Aggoula, Divinités phéniciennes dans un passage du Fihrist d'Ibn al-Nadim. (イブン・アンナディームの『フィフリスト』の一文に於けるフェニキアの諸神格)
- A. Dotan, De la Massora à la grammaire, les débuts de la pensée grammaticale dans l'hébreu. (『マソラ』から文法へ、ヘブライ語に於ける文法的思考の始まり)
- M. Schneider, Remarques au sujet des inscriptions arabes de Mārib. (マールブのアラブ諸碑文に関する若干の注記)
- A. Christol, Les édits grecs d'Asoka: étude linguistique (2). (アショーカ王のギリシャ語訳勅令: 言語学的研究 (2))
- Ch. Bouy, Matériaux pour servir aux études upanishadiques. I. Un manuscrit sanskrit de Tanjore. (ウパニシャッド研究資料、(I) タンジョールのサンスクリット写本)
- Ang Choulean, La communauté rurale khmère du point de vue du sacré. (聖なるものという観点から見たクメールの村落共同体)
- K. Barat, Singqo Sāli Tutung, Traducteur du Sākiz Yūkmāk Yaruq Nom? (『セキズ ユクメク

- ヤルク ノム」の翻訳者、シンコ セリ トットゥ
ン)
- F. Girard, *Le journal des rêves de Myōe, moine japonais de l'école Kegon.* (華嚴宗の日本僧明
恵上人の夢の記)
- 道重 幸臣 T'oung Pao, Vol. LXXV, Livr. 1-3
論文
Luc Kwanten, *The Structure of the Tangut [Hsi
Hsia] Characters.* (西夏文字の構造)
- A. F. P. Hulswé, *Founding Fathers and yet For-
gotten Men. A closer look at the Tables of
the Nobility in the Shih chi and the Han shu.*
(建國の父老にして忘れられた者たち、史記及び漢
書功臣表の検討)
- Christian Lamouroux, *Les contradictions d'un
système hydraulique: l'exemple du bassin de
la Huai sous les Song du nord.* (水利システムの
矛盾: 北宋の淮河流域を例として)
- 書評
Donald Daniel Leslie, *The Chinese-Hebrew Memo-
rial Book of the Jewish Community of K'aifeng,*
par Lawrence V. Berman et Albert E. Dien
- Irina Tigranovna Zograf, *Mongol'sko-kitajskaja
interferenciija. Jazyk mongol'skoj kancelyarii
v Kitae,* par Françoise Aubin
- Anne Chayet, *Les temples de Jehol et leurs
modèles tibétains,* par Françoise Aubin
- André Lévy, trad. et ann., *Fleur en Fiole d'Or
(Jin Ping Mei cihua),* par W. L. Idema
- Susan B. Hanley and Arthur P. Wolf, eds., *Family
and Population in East Asian History,* par H. T.
Zurndorfer
- Kang-i Sun Chang, *Six Dynasties Poetry,* par A.
G. Blankestijn

A list of indological books published in France (1989-1990)

This list has been compiled with the help of École Française d'Extrême Orient, Laboratoire d'ethnologie et de sociologie comparative (Université Paris X-Nanterre) and ER 299 du CNRS (Milieux, société et culture en Himalaya). We apologize for any possible omissions.

Publications de l'Institut de Civilisation Indienne.

Available from DIFFUSION DE BOCCARD, 11 rue de Médecis, 75006 Paris.

C. CAILLAT éd., *Dialectes dans les littératures indo-aryennes*, Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, fasc. 55, Paris 1989, pp. XVI + 580, 550 F.

A collection of essays in the French and English languages about dialectal variations in Vedic Sanskrit (T. Y. Elizarenkova, E. Pirart, G. J. Pinault, M. Witzel), Classical, Epic and Buddhist Sanskrit (S. D. Joshi, R. Salomon, D. Seyffarth, R. R. Rieg, O. von Hinüber), Pali (K. R. Norman, J. Sakamoto-Goto), Aśokan Prakrits (C. Caillat), Gandhari (G. Fussman), Jaina Maharashtra (N. Balbir), Panjabi (D. Matringe), Burushaski (A. Frémont) and Old Khmer (S. Pou).

A. ROȘU éd., *Gustave Liétard et Palmyr Cordier, Travaux sur l'histoire de la médecine indienne*, Documents réunis et présentés par A. Roșu, Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, fasc. 56, Paris 1989, pp. CXXII + 616, 500 F.

Collected papers of two French historians of Indian medicine (*āyurveda*). Dr. Roşu, who edited them, also contributed a thorough introduction dealing with the historiography of *āyurveda*, biographies and bibliographies of G. Liétard and P. Cordier, an English summary of the contents of their papers, and an index.

F. STAAL, *Jouer avec le feu*, Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, fasc. 57, Paris, in print (to be released in December 1990).

A series of lectures about Vedic fire ritual and its supposed meanings.

L. SILBURN, *Études sur le śivaïsme du Cachemire, École Spanda, Spandakārikā, Stances sur la vibration de Vasugupta et leurs gloses*, Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, fasc. 58, Paris, in print (to be released in December 1990).

A French translation, with an introduction, of Vasugupta's *Spandakārikā*.

L. KAPANI, *Le concept de saṃskāra dans le brahmanisme et le bouddhisme*, 1ère partie, Publications de l'Institut de Civilisation Indienne, fasc. 59, Paris, in print (to be released Spring 1991).

A study of the philosophical, psycho-soteriological, ethical and ritual aspects of the concept of *saṃskāra* in Brahmanical and Buddhist thoughts.

Publications de l'École Française d'Extrême-Orient.

Available from ADRIEN-MAISONNEUVE, 11 rue Saint Sulpice, 75006 Paris.

R. GARCIA et C. CHAMPION, *Littérature orale villageoise de l'Inde du nord. Chants et rites de l'enfance des pays d'Aoudh et bhojpuri*, Publications de l'École Française d'Extrême Orient CLIII, Paris 1989, pp. 330, 290 F.

A French translation of Avadhi (from Indu Prakash Pande's collection and Tulśī Dās' *Rāmlā Nahchū*) and Bhojpuri (from Krishnadev Upādhyāya's collection) songs for childhood.

M. BIARDEAU, *Histoires de poteaux, variations védiques autour de la Déesse hindoue*, Publications de l'École Française d'Extrême Orient CLIV, Paris 1989, pp. XII + 356, 108 photographies, 310 F.

A comparative and ethnographic study of the Telugu god Potu Raju (whose representation is a short wooden post) tracing its links with kindred village gods, the hindu Goddess and vedic ritual.

M. L. REINICHE, *Tiruvannamalai, un lieu saint śivaïte du sud de l'Inde, 4, La configuration sociologique du temple hindou*, Publications de l'École Française d'Extrême Orient CLVI, Paris 1989, pp. XVIII + 242, 105 F.

Part of a larger study (five volumes are planned) devoted to the Tiruvaṅṅāmalai Śiva temple. In the present volume, the investigation covers mostly the ritual services, mainly priesthood, temple management and patronage as well as the

deity's status.

Other volumes, planned to be released in 1991, are 1 *The inscriptions*, 2 *L'archéologie du site*, 3 *Rites et fêtes*, 5 *La ville*.

J. POUCHEPADASS, *Paysans de la plaine du Gange, Croissance agricole et société dans le district de Champaran (Bihar) 1860-1950*, Publications de l'École Française d'Extrême-Orient CLVII, Paris 1989, pp. XL + 658, 21 cartes, 380 F.

A detailed study of agrarian economy and society in Champaran (North Bihar) from 1860 to 1950.

Publications du Centre National de la Recherche Scientifique.

Available from LIBRAIRIE DU CNRS, 295 rue Saint-Jacques, 75005 Paris and PRESSES DU CNRS, 20-22 rue Saint-Amand, 75015 Paris.

G. KRAUSKOPFF, *Maîtres et possédés. Les rites et l'ordre social chez les Tharu (Népal)*, Éditions du CNRS, Paris 1989, pp. 276, 66 figures et photos, 8 planches couleur, 215 F.

Based upon an ethnography of rituals, this book brings out the process by which loosely structured original Tharu social units have been moulded into a centralised society. This ritual centralization occurred under the influence of the Nepali hindu kingdom and of the Kānphaṭa Yogīs, who played a leading part in the history of the Dang valley.

A. PADOUX éd., *L'image divine. Culte et méditation dans l'hindouisme*, Éditions du CNRS, Paris 1990, pp. 180, 10 photographies, 200 F.

A collection of eight papers by members of UPR 249 du CNRS. They deal with the interaction between mental and concrete images of the deity in temple and domestic worship, as well as in meditation. The contributors are A. Padoux (general introduction : *Yoginīhṛdaya*), H. Brunner (*āgama-s*), A. Sanderson (Trika), G. Colas (Vaikhānasa Vaiṣṇavas), C. Clémentin-Ojha (Hindu cults), A. Vergati (Newar lineage cults), B. Bäumer (*Vāstusūtra Upaniṣad*), F. Chenet (philosophy).

Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan.

Available from DIFFUSION DE BOCCARD, 11 rue de Médicis, 75006 Paris.

G. FUSSMAN et O. GUILLAUME, *Surkh Kotal en Bactriane*, volume II, *Les trouvailles : monnaies et petits objets*, Mémoires de la DAFA, tome XXXII, Paris 1990.

Second part of the final report of the Surkh Kotal kushan excavations, dealing with coins (G. Fussman) and artefacts (O. Guillaume).

Mémoires de la Mission Archéologique Française en Asie Centrale.

Available from DIFFUSION DE BOCCARD, 11 rue de Médecis, 75006 Paris.

H.-P. FRANCFORT, *Fouilles de Shortughai. Recherches sur l'Asie Centrale Protohistorique*, Mémoires de la MAFAC, tome II, Paris 1989, 2 vol. (vol. I, pp. 518 + 42 figures; vol. II, Pl. 105 (dessins) + XLII (photographies)).

Final report of the Shortughai (Northern Afghanistan) excavations. First established as a kind of Harappan outpost in Bactria, Shortughai was subsequently integrated within the Centralasiatic complex (Molalli, Dashly and Bishkent cultures). This report is noticeable by the author's attempt to bring out a new kind of archaeological report. The conclusion deals with the intricate problems of Centralasiatic bronze age chronology as a whole and population changes, among them the in-coming of the Aryas.

P. GENTELLE, *Prospections archéologiques en Bactriane Orientale (1974-1978)* sous la direction de J.-Cl. Gardin; I, *Données paléographiques et fondements de l'irrigation*, Mémoires de la MAFAC, tome III, Paris 1989, pp. 218, 31 cartes, 16 planches de photographies.

Geomorphological study of the Oxus lowlands where Shortughai was built.

Other publishers.

J. BOURLIAUD, J.F. DOBREMEZ, F. VIGNY éd., *Sociétés rurales des Andes et de l'Himalaya*, Actes du colloque "Méthodologie des recherches pluridisciplinaires sur les sociétés rurales de montagnes - Andes et Himalaya (Grenoble, juin 1987), Versants, Grenoble 1990, pp. 254.

Fifteen symposium papers (out of a total of 33 papers) focussing on rural life in the hills of Central Nepal. They deal mainly with the methodology of that type of research.

C. CLEMENTIN-OJHA, *La divinité conquise, Carrière d'une sainte*, Société d'ethnographie et Université de Paris-X Nanterre, Paris 1990.

An account of the life of Śobhā Mā, born in 1921 from a *śākta* family in Eastern Bengal. She became head of a *vaiṣṇava* monastery and a deified *guru*.

A. DEGRACES-FAHD, *Upaniṣad du renoncement (saṃnyāsa-upaniṣad)*, L'espace intérieur n° 36, Fayard, 75 rue des Saints-Pères, 75006 Paris, 1989, pp. 461, F. 180.

A French translation of 19 *saṃnyāsopaniṣad*, with a long scholarly introduction (164 pages), bibliography, notes and index.

O. HERRENSCHMIDT, *Les meilleurs dieux sont hindous*, L'Âge d'Homme, Lausanne, 1989, pp. 303.

A series of anthropological essays on village (mainly Andhra Pradesh) hinduism.

J.M. LEGER et P.D. COUTE, *Bénarès, un voyage d'urbanisme*, Éditions Créa-

phis, 79 rue du Faubourg Saint-Martin, 75010 Paris, 1989, pp. 152, nombreux dessins et photos, 280 F.

Catalogue of the exhibition on Banaras urbanism, held in Varanasi for the year of France in India. Papers, drawings, and photographs mainly by K. Rötzer and Khandu Deokar.

R. LINGAT, *Royautés bouddhiques (Aśoka. La fonction royale à Ceylan)*, Recherches d'histoire et de sciences sociales n° 38, Éditions de l'École des Hautes Études en Sciences Sociales, 54 Boulevard Raspail, 75006 Paris, 1989, pp. 271, 160 F.

A series of lectures by the late Prof. R. Lingat, posthumously edited by G. Fussman and E. Meyer. They deal with the nature of buddhist kingship as evidenced from Aśokan inscriptions and legends and from Śrī Lankan history.

Ch. MALAMOUD, *Cuire le monde, Rite et pensée dans l'Inde ancienne*, Textes à l'appui, Éditions La Découverte, 1 Place Paul Painlevé, 75005 Paris, 1989, pp. 335, 240 F.

Collected papers of Ch. Malamoud. They deal mostly with the relationship between rites and thought in vedic and brahmanical texts.

M. WJAYARATNE, *Le Bouddha et ses disciples*, Patrimoines (bouddhisme), Éditions du Cerf, 29 Boulevard Latour-Maubourg, 75007 Paris 1990, pp. 262, 160 F.

A French translation of 27 buddhist canonical pali *sutta*-s.

F. ZIMMERMANN, *Le discours des remèdes au pays des épices*, Médecine et sociétés Payot, Éditions Payot, 106 Boulevard Saint-Germain, 75006 Paris, 1989, pp. 310, 190 F.

An ethnological and ecological study of āyurveda as exemplified in today Kerala, mainly by the late Astavaidyān Vayaskara N.S. Moos, from texts and personal field research.

Indological papers printed in the main French Oriental Journals (1989-1990).

Arts Asiatiques (Editor : Musée Guimet, Place d'Iéna, 75116 Paris).

Available from ADRIEN-MAISONNEUVE, 11 rue Saint-Sulpice, 75006 Paris).

Tome XLIV, 1989: W.H. Siddiqui, "A Tughluq garden in New Delhi"; G. Béguin and F. Drilhon, "A Newar bodhisattva in Musée Guimet"; R. Jéra-Bézar and M. Maillard, "Centralasiatic buddhist banners". Acquisitions and exhibitions.

Tome XLV, 1990, not yet released.

Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient (22 rue du Président Wilson, 75116 Paris. Available from ADRIEN-MAISONNEUVE, 11 rue Saint-Sulpice, 75006 Paris).

Tome LXXVII, 1988 (released 1990): G. Fussman, "Buddha and bodhisattva in Mathura art, from unpublished Kushan inscriptions"; J. Deloche, "Musical instruments in Hoysala sculptures"; A. Bareau, "Beginnings of Buddha's predication according to the *Ekottarāgama*"; P.S. Filliozat, "Sadyojyoti's *tattvasaṅgraha*"; U. Niklas, "Introduction to Tamil prosody".

Bulletin d'Études Indiennes (Association Française des Études sanskrites, Institut d'Extrême-Orient, Collège de France, 52 rue du Cardinal Lemoine, 75231 Paris Cédex 05).

N° 7, 1989, not yet released.

Journal Asiatique (3 rue Mazarine, 75006 Paris). Available from LIBRAIRIE ORIENTALISTE PAUL GEUTHNER, 12 rue Vavin, 75006 Paris.

Tome CCLXXVII, 3-4, 1989: Ph. Ramirez, "Cosmology and politics in Arunachal Pradesh".

Tome CCLXXVIII, 1-2, 1990: A. Christol, "A study of the loan-word *sramenai* in Aśokan Greek (RE XIII, G)"; Chr. Bouy, "About the texts of the *Ātmaprabodha*, *Mahā*, *Pañgala*, *Tejobindu* and *Yogatattva-Upaniṣad-s*".

Tome CCLXXIX, 1-2, 1991: G. Fussman, "A Gandharan inscribed mask of Śiva".

Puruṣārtha (Centre d'Études de l'Inde et de l'Asie du Sud, École des Hautes Études en Sciences Sociales, 54 Boulevard Raspail, 75006 Paris).

n° 12, 1989, "Prêtrise, pouvoirs et autorité en Himalaya" edited by V. Bouillier et G. Toffin: G. Toffin, "Tantrism and Vedic Heritage among the Rājopādhyāya Brahmins of Nepal"; A. Michaels, "Paśupati's Holy Field"; D. Vidal, "Being a Priest in Himachal Pradesh"; G. Krauskopff, "Political Centralization and Priesthood System among the Tharu in Dang (Nepal)"; A. de Sales, "The Kham-Magar Chamans"; B. Steinmann, "The Powers of the Tamang Priest"; P. Dollfus, "Village's Lama of Ladakh"; D. N. Gellner, "Monkhood and Priesthood in Newar Buddhism"; V. Bouillier, "Yogis and Kingship"; M. Gaborieau, "Powers and Authority of the Sufis in the Himalayas".

フランスからの来日

ジェルネ氏が 日本学士院客員に

(福井文雅)

ジャック・ジェルネ Jacques GERNET 教授 (コレージュ・ド・フランス Collège de France. フランス学士院会員 membre de l'Institut. 中国学) は、平成2年1月12日に日本学士院が開催した第八百三十五会総会において、日本学士院法第六条により、日本学士院客員に選定された。

そして日本学士院の招聘により、10月26日から11

月8日まで、夫人同伴で来日された。29日午前11時に日本学士院を訪問し、脇村義太郎院長と懇談。同席者は吉川逸治氏などの関係会員と川名一成事務長、鎌田事務官他を含めて10数名。その内で日仏東洋学会関係者は、山本達郎、秋山光和、彌永昌吉、福井文雅の五氏であった。学士院の会議場や図書室など、内部の案内を受け、教授は記念メダルを授与された。その後、上記の人々と共に、上野精養軒でディナー形式の昼食会に臨み、更に懇談を続けられた。

同日午後、ジェルネ教授は日仏会館での東洋学関係者懇談会（別項記事、参照）にも出席し、夕刻は日仏会館・財団法人東方学会・日仏東洋学会共催の講演会で講演、続いて日仏会館学長主催、東方学会後援の歓迎レセプションに臨まれた。

30日は10時半に東京大学東洋文化研究所を訪問、池田温所長や溝口雄三教授（中国哲学）他の研究者と懇談され、山上会館地下の特別食堂で昼食。午後同大学文学部を訪問された。なお、この日以降は、フランス極東学院 l'École française d'Extrême-Orient の新院長として、アジア諸地域の支院歴訪の旅で丁度来日中であったレオン・ヴァンデルメルシュ Léon VANDERMBERSCH 教授夫妻が、教授に同伴する場合もあった。

同日19時半から、フランス大使館公使主催夕食会。31日は、昼に上智大学アジア文化研究所を訪問し、所長の石澤良昭教授と昼食を共にされた。

11月1日に宿舎パレス・ホテルを出て、京都に出发。興膳宏教授（日仏東洋学会・代表幹事）の出会いを受けた。Mlle Bottero ボッテロ女士他の案内で京都大学人文科学研究所を訪問。2日夜は島田虔次京大名誉教授を始め、興膳宏、坂出祥伸、磯波護、高田時雄、H・デュルト、ボッテロ、御牧克己の八氏が「海皇」で催した招宴に出席した。4日は妙心寺花園会館での東方学会総会に出席、懇親会で挨拶（福井が学士院での歓迎行事や日仏会館での講演等について補足紹介）。

京都ホテルに四泊のあと、5日～7日は、教授の希望で広島、宮島、大三島、今治、高松、岡山を遊覧。8日午前、大阪を発って成田空港経由、同日無

事帰国された。この旅行には、吉田敏行・日仏東洋学会会員が案内役として随行した。

ジェルネ氏講演会

福井 文雅

10月29日18時半から一時間余、日仏会館二階会議室でジェルネ教授の講演会が開かれた。日仏会館に加えて、今回は財団法人東方学会が特に共催に加わり、受付係を始め、講演後のレセプションにまで配慮して戴けたことは望外の幸いであった。進行役を秋山光和学術委員会委員長が務め、開会の辞をセカルディ学長が述べ、ジェルネ教授の紹介を山本達郎東方学会会長・日仏東洋学会名誉会長がなされた。

題目は Comment il faut lire l'histoire : une note sur les idées de Wang Fuzhi (1619 - 1692)

「歴史の読み方—王夫之の思想の一面」。通訳には明神洋（みょうじん・ひろし。早大・東洋哲学・大学院博士課程修了）と吉田敏行（早大仏文専修）とが当たった。二人とも日仏東洋学会会員である。しかし、質疑応答に入ると、デュルト氏その他、日仏東洋学会会員が入れ代わり立ち代わり通訳に加わり、大変に温かい、sympathique な雰囲気ですべて終了した。

会場には前記懇談会への出席者に加えて、フランス駐日公使シュブルナ氏 Jean-Jacques SUBRENAT, Ministre de l'Ambassade de France やジラルル氏も見えて、会場は超満員になり、セカルディ学長は「常連でない来会者の顔も多く見かけて、大変有り難い。」と閉会の辞に喜びの気持ちを述べられた。講演に続く学長室でのカクテルも盛況であった。

因みに、この講演原稿のフランス文は Prusek プルーシェック教授記念論集に贈られ、邦訳文のみが『東方学』82輯（1991年7月）に掲載されることになっている。

会員消息

(会員各位からの申告をお待ちします)

大地原豊氏が人文科学 アカデミー客員会員に

本会顧問、大地原豊氏(京都大学名誉教授、サン
スクリット学)は、フランス学士院人文科学アカデ
ミー(Académie des Inscriptions et Belles Let-
tres)の1990年6月29日の会議に於て、その客員会
員(correspondant étranger)に選出された。我が
室では、やはり本会顧問である秋山光利日仏会館学
術委員会委員長に次いで二人目の栄誉であり、この
朗報に接し、一同心からお祝い申し上げる。

大地原豊氏は1923年京都生まれ。1954年フランス
政府給費留学生として渡仏、故Louis RENGU 教授に
師事し、インド文法学を修めた。その成果はパーニ
ニ文法の注釈書 "Kāśikā-vṛtti" の仏訳3巻(1960,
1962, 1967年)としてパリから刊行された。Société
Asiatique 名誉会員。パルム・アカデミック(シュ
ヴァリエ)受勲。

渡仏記

フランスで暮らした九ヶ月

坂出 祥伸

昨年(一九八九年)七月十日から今年三月末日ま
で、およそ九か月間を、勤務先・関西大学の在外研
究員としてフランス(ブザンソンおよびパリ)に滞
在し、学問上はもとよりのこと、風俗・生活習慣な
どの面でも知見を広めてきた。

私を引き受けて下さったのは、主として国立高等
研究院 Ecole Pratique des Hautes Etudes の第五
部門・宗教学 Science Religieuses のシッペール教
授 Kristofer Schipper であり、主たる目的は、シ
ッペール教授のもとで道教儀礼を研究することであ
った。なお、同じ第五部門のヴァンデルメルシュ教

授にも、私の受け入れ、宿舎の手配、語学研修など
について細々と御配慮をいただいた。

I、ブザンソンの語学研修

七月九日早朝、パリのシャルル・ド・ゴール空港
に着くと、シッペール教授みずからの出迎えを受け、
車で6区のサンジェルマン・デ・プレに近いプレ・
オ・クレールにある小さなホテルまで運んでくださ
った。ここは、すぐ近所に住むジャン＝ノエル・ロ
ベール氏(日本の天台宗を研究し、一九八八年度黒
沢・クローデル賞を受賞。C.N.R.S. 研究員。今年十
一月よりオートゼチュードに新設の日本仏教部教授
に就任予定)のお世話による。ここに十五日まで、
つまりパリ祭(昨年はフランス革命二百周年)の翌
朝まで泊まった後、TGVで三時間東、ブザンソン
Besançon へ向かった。ここはスイス国境に近い、
フランシュ・コンテ地方の中心都市で人口は十二万
ほどの小さな町だ。町の中心部はドゥーブ川に囲ま
れているが、その周辺は見渡すかぎり牧場とブドウ
畑が広がっている。この大学の応用語学センター
で一月半、フランス語会話の強化訓練を受けた。月
曜日から金曜日まで一日五時間の授業は、私のよ
うな高齢者にはかなりきつかった。けれども、モン
ペリエ、エクサンプロヴァンスなど他の大学の夏期
講習よりも授業時間は多いらしいし、まったくの田
舎町でこれといった観光向きの名所旧跡もない。地
中海沿岸のリゾート地のようなざわめきもない。と
いうわけで、本気でフランス語会話を勉強しよう
という若い人には、ぜひここで、とおすすめしたい。
日本人が目立ったのは、この大学の特別な関係に
ある青山学院大学仏文科の学生が十数名来ていた程
度で、そのほかには、企業マンや外務省研修生が若
干いたが、彼らはじつに真剣に勉強していて、いい
雰囲気だった。なお、この地では青山学院大学仏文
科の中条忍教授御夫妻および外人講師ミシェル・ジ
ャック先生のお世話になった。

II、パリ・国際大学都市での生活

九月一日からはパリに戻り、国際大学都市(シテ
・アンテルナショナル・ド・リュニヴェルシテール)
の中にある日本館で、とりあえずバサジュール
として一か月をすごした。同じ館内におられた立教
大の朝比奈道教授、岡山大学大仏文科の佐藤敏教授の面
識を得、特に佐藤敏教授には三月まで何かにつけお世
話になった。バサジュールの宿泊費は一泊一三〇F、
一か月三九〇〇Fととても高くつくので大久保館長
(名古屋大法学部教授、本学会会員)に必要な書類を
提出(これが実は色々あり、しかもすべて仏文で記
載するので煩わしい。例えば源泉徴収票をフランス
語に書き改める)して、レジダン(宿泊費一か月一
八〇〇F)に切り換えてもらうことにした。といっ
ても、できることなら日本人の多い日本館にそのま
まと希望していたのだが、それは叶わず、十月二日
にモナコ館に引越した。

モナコ館はブルヴァール・ジュールダン47Aにあ
り、日本館から歩いて十五分ぐらい。RERのシテ

・ユニヴェルシテールとメトロのポルト・ドルレアンの間ぐらい。ここでの生活は、まずまず快適だった。というのも、部屋に小型冷蔵庫と直通の電話があるから、何といっても便利だ。私の部屋は二階で、調理室は一階にあるが、自炊する者はほとんどいない（同じ階にアジア系がいないので）から、私が独占しているようなもの。大学都市の中にレストランが二つあり、一食10F弱でとても安いのだが、油っこい料理ばかりなので胃腸をこわしそうだった。ただ、秋ごろにオープンしたイスパニヤ館地下レストランだけは、45Fもするだけに、おいしく、特にパエリアが口に合った。モナコ館の日本人は、明治学院大・石井坦先生（数学）、お茶の水女子大・宮島喬先生（社会学）、多摩美大・楢垣檀先生（絵画）と私の四人だけ。この方々とお話する機会はあまりなかったが、すぐ近くのキューバ館に住まわれていた京都大仏文科の広田昌義教授とは、時々外で食事したり、私の部屋で夜おそくまで話したりした。

国際大学都市での生活記録は見かけたことがないので、今後利用される方には、簡単ながら、多少お役に立つかも知れないと思い、特に記した。

Ⅲ、講義・コロックなどへの出席

十月に入ると、大学や研究機関の活動が始まる。それにともない、コロックや講演会も開かれるようになる。私が出席したのは、まず、十月二日から四日まで、パリ第一大学のマレにある研究所で開かれた、「宗教とアジア社会」Croyances Populaires et Sociétés Asiatiques という日仏シンポジウムである。日本からは埼玉大名譽教授・矢沢利彦、東京大教授・加藤栄一、上智大教授・石沢良昭（本学会会員）、北海道大教授・坪井善明（本学会会員）、上智大助教授・寺田勇文の五氏が報告され、また熱のこもった討論がおこなわれた。私もヴァンデルメルシュ教授の勧誘を受けて出席させていただいた。そのほかに、パリ留学中の白百合女子大教授・山本節氏（日本文学）、東大大学院学生・増島建氏（ヴェトナム政治史）も出席された。このシンポジウムについては、一部分は矢沢教授が「東方」一〇九号（一九九〇年四月）に紹介されたし、また本誌にも詳しい記事が載せられるであろう。

次に東大名譽教授・秋山光和先生（本学会評議員）が、十月四日、十一日の二回にわたり、コレージュ・ド・フランスで「日本美術における時間と空間」と題する講演をされた。フランク教授が司会され、エライエ教授など、フランスの日本学の著名な先生がたが聴講されていた。

十二月に入ると、早稲田大学教授・福井文雅氏が日仏会館から派遣される学術使節としてパリに来られ、八日にアジア協会で、十三日にウィルソン通りにあるアジア会館の講堂でと、二回の講演をされた。彼とは専攻分野もほぼ近く、親しい友人でもあるので、七月以来の中国関係学会、あるいは本学会の最新情報をあれこれ教えていただいた。私の滞仏中に、中国学でお二人、本学会でもお二人の立派な方が亡くなられたのである。（福井教授の渡仏については、本誌前号に報告されている。）

次に、十一月中旬になって、オートゼチュードやコレージュ・ド・フランスの講義が開始され、私も次の六つの講義に出席したので、各教授の講義題目を記しておこう。

高等研究院第五部門

シッペール K. SCHIPPER

1. 中世以前の道教儀礼 La liturgie taoïste de Haute Moyen Age 2. 「莊子」講読 Les lectures du Zhuangzi 金曜日十四時～十六時 前者は近刊の陳垣著「道家金石略」を使用されていた。

ヴァンデルメルシュ Leon VANDERMEERSCH

韓愈の周囲の新儒教の先駆者たち Les premiers précurseurs du Néoconfucianisme autour de Han Yu (768-824) 土曜日十時～十二時

高等研究院第四部門

ディエニー Jean-Pierre DIÉNY

古代中国の歴史と文学 Histoire et Philologie de la Chine classique

1. 「世説新語」を継承するもの La postérité de Shishuo xinyu 2. 古代中国の色彩と文学 Couleur et littérature dans la Chine antique 月曜日十四時～十六時

前者は「西京雜記」などの古小説をテキストにし、出典調べをとまなう翻訳を受講生に割当てていられた。後者は今年四月より。

スワミエ Michel SOYMIE

中世近世中国の歴史と神学 Histoire et théologie de la Chine Médiévale et Moderne

1. 七、八世紀中国の古文書研究、草書体 Recherches sur le paléographie chinoise VII, VIII^e siècles, l'écriture cursive. 2. 敦煌写本、テキストの講読 Les Manuscrits de Dunhuan, lecture de Textes 火曜日十四時～十六時

私の聴講した範囲では、敦煌文書を示しながら避諱字の例を指摘し解説し、さらに漢代以後の避諱字の種類を説明されていて、とても有益だった。日本でも、こういう講義があってよいと思う。

コレージュ・ド・フランス

ジェルネ Jacques GERNET

セミナー・唐甄のテキストによる翻訳についての諸問題 Séminaire : Problèmes de traduction, Textes de Tang zhen 月曜日十一時半～十二時半

「潜書」の中から抜萃して翻訳注釈されていた。

フランク Bernard FRANK

セミナー・平安時代の文学と信仰、源為憲の「三宝絵」 Séminaire : Littérature et dévotion à l'époque de Heian : le Sambôe de Minamoto no tamenori 金曜日十一時～十二時

平安時代の仏教説話集「三宝絵」の序の部分を出典をあげ、用例をひきながら、綿密な注釈と翻訳をされているのには敬服した。

以上の六科目の講義を聴講させていただいたほか

に、シッペール教授が特別に私のために、毎週火曜日十七時から一時間、私を自宅に招いて道教儀礼の講義をしてくれた。彼が台南で収集した科儀用の道経を書棚から出して、斎戒がどのような順序で行われるかを詳細に解説してくれた。これには大変刺激を受けた。

IV、私の行った講演と調査旅行

私は当初、シッペール教授などに講演はなしにしてほしいと頼んで、気楽なフランス生活を期待していたのだが、フランスの中国学の世界に入ってみると、そのような甘い考えは通用しなくなり、結局、次の三つの講演をせざるを得なくなった。

- 1、日本語における「氣」と中国思想における「氣」
一九九〇年一月十七日 ドフィーヌの東洋語言文化研究所 Institut national des langues et civilisations orientales レイモン・アロン教室で日本語科学生を対象。当該学科フランソワ・マセ François MACE 教授の通訳。
- 2、方以智——ヨーロッパと対決する「氣」の哲学——
一九九〇年二月八日 コレージュ・ド・フランス四号室 中韓日科学歴史研究団 Histoire des techniques et des sciences en Chine, en Corée et au Japon の月例会のゲスト・スピーカーとして。京大に留学したことのあるユベール・ドラエ Hubert DELAHAYE 氏が私の日本語原稿をフランス語に翻訳してくれた。
- 3、内景図的演変 一九九〇年三月九日 高等研究院 (ソルボンヌ) のシッペール教授の講義室で。中国語を使用。

これらの講演の中、(2)は、放送大学印刷教材、青山昌文編「比較思想——自然について——」(一九九〇年三月刊)に同じ題名で収められている。また(3)は、山田慶児編「中国古代科学史総論編」(京大人文科学研究所、近刊)に収められる。また(1)は、明年創刊される予定の日本語科の雑誌に載る。

講演の準備のために、あるいは漢籍所蔵状況の調査のために、パリの国立図書館 (ヒブリオテーク・ナショナル) とコレージュ・ド・フランスの図書室 (ウィルソン通りのアジア会館館内) は、たびたび利用したし、また、福井文雅教授に同道して、パリの北方にあるリール市に、東洋語学校日本語科初代教授レオン・ド・ロスニイ Léon de Rosny (1837-1914) の蔵書を見学に行ったことなど、図書館めぐりについては、別の機会に書く予定。

私のように中年になって、はじめてフランスに長期滞在したにもかかわらず、健康ですごくことができ、なおかつ、生活上あまり不便をしないですんだのは、これまでにお名前を記したフランス人、日本人のおかげであるが、特にシッペール教授、ロベール氏、カリノフスキー氏 (京大人文研に留学していた)、仏教学の郭麗英女史、フランソワ・マセ教授御夫妻、堀内美都嬢 (なだ・いなだ氏二女)、佐藤巖教授などの御好意あふれるおつきあい、御探助のおかげであり、こうして私は、快適に楽しかったばかりでなく、学問的にも人生体験の上でも、貴重で

有意義な九か月間をすごすことができた。ここに御礼を申し上げると同時に、この経験をムダにしないようにと心に誓っている。

V、辭慶歡嬢の早逝を悼む

七月上旬のある朝、早大の福井文雅教授からの電話で Kwang Hing Foon (辭慶歡) 嬢が急死したことを知らされた。リュウマチ治療の薬害とのことだった。

三月二十七日、彼女は郭麗英女史と二人で、帰国する私のために送別の宴をポルト・シュワジーの中華レストラン「中国城」で開いてくれた。その時、日本留学の話が出たので、帰国してから私は、学術振興会の書類を送って、明年なら招聘研究員としてお引受けできるからと手紙を添えた。その返信がいつこうに来ないの心配していたところだった。彼女にも、パリ滞在中、何かとお世話になったし、よくカフェに行って雑談もした。特に、パリ郊外のヴァンセンヌ公園に仏教寺院があると聞いて、彼女に案内をしてもらった時のことは印象深い。

彼女の出身は、広東省の何とか縣と言っていた。私は南海県出身の清末思想家・康有為の研究者でもあるので、ある日その書のことを話すと、直ちに、康有為の書は嫌いだとはっきりした答えが返ったのには驚いた。よく聞くと、毎日書法に親しんでいることが分かった。

一九八五年秋、パリで開かれた第四回日仏コロックの時に、はじめて彼女の姿に気づいたが、一昨年 (一九八八年) 秋、伊東で開かれた第五回日仏コロックには、「王昭君伝説の変遷」という題で報告した。終了後、京都に来て、京大・興膳教授と私とが祇園の居酒屋で飲けた宴会にも出てくれた。気性ははっきりした、それでいて、とても世話好きな、いかにも広東人らしい女性だった。

彼女の博士論文は、Wang zhaojun—Une Héroïne Chinoise de l'Histoire à la Légende, 1986 (王昭君——歴史伝説の中の中国のヒロイン——) と題され、Mémoires de l'Institut des Hautes Etudes Chinoise (中国高等研究所研究報告) のシリーズの第27冊に入っている。

日本に留学して、これから学問を伸ばそうという前に、急死してしまわれた。惜しいことだ。合掌。

フランス滞在中の諸成果の記録としては、本稿のほか、「パリの本屋さん」(IX2)を「東方」——〇、——号 (一九九〇年五月、六月) に、「フランス中国学の近況・管見—哲学・宗教を中心に——」を「集刊東洋学」第64号 (一九九〇年十一月刊) に、それぞれ寄稿した。また、今年十一月十八日に開かれる日本道教学会第41回大会 (九州大) で、「欧米における養生思想研究の動向」と題する私の発表も、フランス滞在成果の一部である。生活上の雑感めいた記録は、「日本海新聞」「山陰中央新報」などの地方紙に寄稿したが詳細は省略する。

一九九〇年八月八日

○受賞

前田専学氏、1989年春、日本学士院賞
市古貞次氏、1990年秋、文化勲章
服部正明氏、1990年秋、紫綬褒章
Leon VANDERMBERSCH (レオン・
ヴァンデルメルシュ)
1990年秋、勲二等瑞宝章

○会員の出版物

小河織衣『メール・マティルドー日本宣教と
その生涯』(有隣堂新書37 有隣堂)
加藤純章『經量部の研究』(春秋社。博士論文)
金岡照光『敦煌の文学文献』
(編著『講座敦煌9』大東出版社)
上村勝彦『インド古典演劇論における美的経験』
— Abhinavagupta の rasa 論 —
(東京大学東洋文化研究所報告。
博士論文)
高崎直道『講演と随想—愛と憎しみの彼岸』
(すずき出版)

国際佛教学研究(湯山明所長)刊:

Paul Harrison, The Samādhi of Direct
Encounter with the Buddhas of the Present

(近刊予定)

大谷暢順 OTANI Chōjun,

Les problèmes de la foi et de la pratique
chez Rennyo à travers ses lettres. Ofumi,
(Collège de France, Bibliothèque de
l'Institut des Hautes Etudes japonaises),
Maisonneuve & Larose, Paris (博士論文)

関連出版物 —

第五回コロック・第二部会報告・議事録 —

“ Actes du Colloque franco-japonais,
Kyoto, 4-8 octobre 1988 ”

Documents et Archives provenant de
l'Asie centrale (京都・同朋舎)

François JULLIEN, Procès ou Création. Une
introduction à la pensée des lettrés chinois.
Essai de problématique interculturelle.

Seuil/ Des Travaux, Paris, 1989

花園大学国際禅学研究所『研究報告』第一冊 —
林信明譯編『ポール・ドミエヴィル禅学論集』

Choix d'études sur le Tch'an par Paul
Demiéville. édité et traduit par Nobuaki
Hayashi. Avant-propos par Seizan Yanagida.
Publication de l'Institut international
de recherche sur le Zen, Université Mana-
zono, Kyoto, 1988 (非売品)

(近刊予定)

第五回コロック・第一部会報告・議事録 —
(東京・平河出版社)

出版記念会

上記小河織衣会員の著書『メール・マティルドー
日本宣教とその生涯』の出版を祝って、今年の九月
八日午後五時より、東京・原宿の「南国酒家」で盛
大な祝賀会が開かれた。発起人だけでも、青木雨彦、
岩瀬孝、小田島雄志、河竹登志夫、早乙女貢、福井
文雅、新庄嘉章、富田仁、なだ いなだ、松原秀一
など四十人。

著者はかねてから明治初期のフランス人修道女の
研究を重ねていたが、1987年にパリ・サン・モール
修道会に四ヶ月通って関係古文書を調査して完成さ
せたのが本書である。その為に、小本ながら著者の
思いが満ち満ちて、感動的な成果になっている。

○新入会員 (平成2年後期)

鈴木董(SUZUKI Tadashi)

(東京大学東洋文化研究所助

教授, オスマン史) 1990. 4. 2

庄垣内正弘(SHOGAITO Masahiro)

(神戸市外国語大学教授,

ウイグル語・ウイグル語文献) 1990. 4. 9

シャリエ、イザベル(CHARRIER Isabelle)

(フランス語教師,

日本近代美術史) 1990. 4. 18

遠藤光暁(ENDO Mitsuaki)

(青山学院大学経済学部)

専任講師、中国語音韻史・方言学)

丘山新(OKAYAMA Hajime)

(東京大学東洋文化研究所助教授、

中国における仏教經典の受容)

大谷暢順(OTANI Chojun)

(名古屋外国語大学教授、蓮

如「御文」)

○住所・所属の変更

宮沢正順氏

石井米雄氏

【新】上智大学アジア文化研究所

坪井善明氏 1989年4月より1991年3月まで、在
ヴェトナム日本大使館・専門調査員
として出張。

喜多村恵子氏の住所が不明となっています。ご存
じの方は高田時雄幹事(名簿管理担当)まで連絡下
さい。

○住所録訂正

廣川 敏

○退会者

山中一郎氏 1990.4.1. 尚樹啓太郎氏 1990.4.22.

○訃報

前回の日仏コロック・第一部会に参加され、その
絶えざる笑顔で会を明るくリードしてくれた鄭慶敏
女士Mademoiselle KWONG Hing-foon(フランス国立
学術研究センターCNRS研究員)は、今年7月2
日、パリで亡くなられた。持病の関節症へ使ってい
た強い薬の副作用が原因で、肺に閉塞と浮腫とが
出来ていたので、数週間の治療も甲斐がなかった。二
百人以上もが葬儀に参列し、ジェルネ、ディエニ、
シペールの各教授が弔辞を読んだ。「我々にとって
大きな損失だ」とシペール教授は本学会あてに書い
て来られた。

女士は香港の出身。王昭君についての博士論文を
出版したばかりであった。書が巧みで、欧米人中国
学者の刊行物に挿入する漢字は、彼女の手に成るも
のが多かった。例えば、オックスフォード大学のピ
エット・ヴァン=デル=ルーン Piet van der Loon
教授の大著、Taoist Books in the Libraries of
the Sung Period『宋代収蔵道書考』(1984)の百
二〇頁に近い道書綜録と漢文索引も、全て彼女の手
になるものであった。

伊東温泉郷でのコロック第一部会打ち上げ会の時、
浴衣で中国古典歌謡を歌ってくれた姿が、思い出さ
れる。日本に留学される直前の出来事であった。

(F. F.)

報告

平成元年度総会報告

平成元年度会員総会は、平成2年3月29日(木)
学会事務局の置かれている早稲田大学・大隈会館に
おいて行われた。関西方面から興膳監事、御牧・中
谷・高田の3幹事の計4名の方が遠路来京され、在
京の福井代表幹事、石沢評議員を含めて5名の評議
員・幹事が参加し、楠山春樹会員(日本中国学会理
事長・学術会議会員)他17名の会員の出席があっ
た。下記の役員会も含めて、実はもっと多くの参加
予定者があったが、当日が激しい雨のために、多数
の欠席者が(とりわけ年長者会員から)出たことは
残念であった。

総会に先立ち、午後3時より大隈会館1階和室会
議室にて、理事会を行った。出席者(敬称略、ABC
類)は、福井、羽田(正)、石沢、興膳、前田、御
牧、中谷、高田、田中(文)。学会役員補充選出・
第6回日仏コロックなど多くの議題を5時まで討議
し、終了後ただちに会館2号室での総会に移った。

総会は福井代表幹事の司会により、5時より次の
ように進行的した。(敬称略)

1. 開会の辞 楠山春樹
2. 総会議事 (議長 石沢良昭)

会計報告

日仏東洋学会平成元年度会計決算報告

◇収入	普通会員会費	285,000
	前年度繰越金	142,256
	日仏会館補助金	40,000
	利息	993
	<hr/>	
	計	468,249
◇支出	印刷費	58,700
	通信費	43,952
	会議費	0
	消耗品費	2,488
	支払報酬費	48,630
	雑費	18,540
	予備費	0
	<hr/>	
	計	172,310

残 金 収入-支出 : 468,249 - 172,310 = 295,939

平成元年度残金295,939円は、平成2年度への繰越金とする。

上記の如く相違ありません。

平成2年3月15日

日仏東洋学会会計監事

興膳 宏

日仏東洋学会平成2年度会計予算

◇収入	普通会員会費	250,000
	前年度繰越金	295,939
	日仏会館補助金	40,000
	<hr/>	
	計	585,939
◇支出	印刷費	200,000
	通信費	100,000
	会議費	30,000
	消耗品費	10,000
	支払報酬費	40,000
	雑費	45,939
	予備費	160,000
	<hr/>	
	計	585,939

A. 審議事項

(1) 会計報告

羽田正会計幹事より平成元年度決算報告および平成2年度予算案の説明、眞膳宏会計監事より監査報告があり、承認。別表参照。

(2) 第6回日仏シンポジウム

中谷英明幹事より、1991年にフランスで開催される予定の第6回日仏コロックについて説明があり、福井文雅代表幹事が補足説明した。なお、シンポジウムについては、『通信』第11号にて既報しており、今回の報告は3月末までの情報に基づいてなされた。その概要は、以下のようであった。

- ①これまで日仏コロックを財政的に支えてきたフランス外務省が、次回からは部門の大幅削減を要請してきた（今回は10部門参加したが、2ないし3にしぼるとのこと）。
- ②フランス語を話さない人も参加できるものとする。
- ③5月22日に、CNRSの研究班長、フランス極東学院院長、およびコレージュ・ド・フランス教授による会審を開き、正式に実施計画を決定の上、CNRSに補助を申請する。
- ④主題は、「諸地域文化への仏教の適応」 L'adaptation du bouddhisme aux cultures locales とする。
- ⑤開催場所は Collège de France (Fondation Hugo) または Instituts d'Asie du Collège de France、時期は1991年9月23日～28日の予定。

今回のコロックは、前回とは異なり東洋学関係は部会を分けることなく一部会で行い、仏教の地域文化への浸透状況を共通テーマにして、中央アジア・東南アジア・中国・インドなどの写本や碑文をもとに討論が行われる予定である。なお、参加希望の会員は、遠慮なく5月中旬までに学会に申し出ていただきたい。ただし、渡航費は各自の自弁、ということになっている。（本会の窓口は、中谷幹事が当たっている。）

(3) 学会役員の補充選出

昨年末に、本会名誉会長羽田明先生ならびに会長榎一雄先生が相次いで御逝去されたため、会長の選出が行われた。併せて学会発展のため、新たに顧問その他の役員を補充した。その結果以下の方が役員に選出された。従来の役員名は省き、新役員名のみを挙げる。

会長	福井文雅
顧問	秋山光和 彌永昌吉
評議員	竺沙雅章 石井米雄 彌永信美 京戸慈光 松原秀一 山田利明
推薦委員会委員	原 実 御牧克己
代表幹事	興膳 宏
監事	石沢良昭

会長の選出は、既に学会事務局宛に届いていた日・仏双方の名誉会長と顧問とによる推薦、並びにフランス側から山本名誉会長宛に届いていた要望書（フランス極東学院院長名義）などを勘案しつつ、評議員会にて検討の結果、代表幹事福井文雅氏が新会長に推挙され、（一般会員からの委任状も含めて）総会において承認された。

B. 報告事項

(1) 日仏会館企画「フランスの東洋学」研究一特に日本学について—について、福井新会長より報告があった。（秋山顧問から報告の予定であったが、欠席のため代行）

(2) 日本学術会議へ学術団体としての再登録は、3年に一度必要なため、本年度前田幹事がこれを行うことになった。次期学術会議会員選挙については、本会としては推薦委員会にて検討する。

(3) 『日仏東洋学会通信』第11号・12号の編集、及び会員名簿作製について、中谷・高田両幹事より報告があった。尚、『通信』第11号と名簿は、当日参加者には手渡しで、他は郵送にて配布することとなった。

(4) 興膳代表幹事より学会事務報告があり、会計的に無理があるので、会員の拡張が必要とのことであった。当学会に興味をお持ちで未入会の方をご存知の会員は、入会をお勧めいただきたい。

また、長年にわたって会費滞納の会員へ督促の手紙を出すことにした。それでも未払いの場合には、今後の諸会合の連絡や、『通信』の発送は停止せざるを得ないかもしれない。

(5) 福井会長より、日仏会館の諸通達の説明、第33回 ICANAS 参加についての報告があった。日仏会館学術委員会からの通達は、『通信』第11号19頁にて既報のごとく、「日仏学者交換」と「日仏共同研究」についてであり、申し込み窓口は本会代表幹事が行う。ICANASはトロントで開催され、使用言語は英・仏語どちらでも良いとのこと

であった。

また、石沢評議員から現在アンコール・ワットの日仏共同の修復が計画されていることの報告があった。

3. 新役員挨拶 福井文程新会長

4. 閉会の辞 栗原圭介

総会終了後、7時より大阪会館2号室においてカクテル・パーティーを行い、山田利明氏・田中文雄の司会のもとに、中村璋八氏を始めとして出席者各自の自己紹介と近況報告がなされ、懇親と意見交換の実が挙がり、8時半、興膳宏・新代表幹事の閉会の辞で終了した。

会場を準備して下さった福井会長、並びに早稲田大学に対して、厚く御礼申し上げたい。

(田中文雄 記)

報告

第6回日仏シンポジウムの準備

報告 中谷 英明

1991年秋にフランスで開催される第6回日仏学術シンポジウム『諸地域文化への仏教の適応』(L'adaptation du bouddhisme aux cultures locales)の準備は、フランス外務省の厳しい予算措置にもかかわらず、日仏双方に於て着々と進行中である。前回の本会総会(本年3月29日)に於て報告した内容は本誌「平成元年度総会報告」に要約されているので、その後の進展をここに報告する。

5月22日に予定されていた、フランス側の「シンポジウム準備総会」は、直前に日本側から誤った情報が伝わったため(7月12日付BAZIN教授書簡)、6月24日に延期されて、Instituts d'Extrême-Orient du Collège de Franceに於て開かれた。G. FUSSMAN氏が司会した会議には、L. BAZIN, A.M. BLONDEAU, B. FRANK, P.B. LAFONT, P. MAGNIN, K. SCHIPPER, G. VEINSTEINの各氏が出席、J. GERNET, D. LOMBARD,

L. VANDERMEERSCHの各氏が都合のため欠席された。

会議に於て採択された案は、先に本会総会で報告したところとほぼ変わりはない。ただ次のように、会議の構想の詳細が一層明らかとなった。

主会議場における発表者は、時間の都合上、日仏双方から10名ずつ、合計20名とし、それ以外の参加者は、小部会に於て発表するものとする。発表時間は30分、その後質問・討議に15分を当てる。

日本側参加者に対する滞在費補助を出すこととする。

会議終了後、論文集の出版が予定されている。

なおフランス側代表は、下記の10組織を代表する10名とする。

○時期 1991年9月23-28日

○場所 Instituts d'Extrême-Orient du Collège de France (52 rue du Cardinal-Lemoine Paris 5e).

○フランス側参加組織

URA 1057 du CNRS: Etudes Turque.

URA 1063 du CNRS: Equipe de recherche sur les manuscrits de Dunhuang et matériaux connexes.

URA 1069 du CNRS: Etudes japonaises.

URA 1074 du CNRS: Idéologies et réseaux dans l'archipel insulindien.

URA 1075 du CNRS: La péninsule indochinoise d'hier et d'aujourd'hui: peuples et états.

URA 1229 du CNRS: Langues et cultures de l'aire tibétaine.

URA 1324 du CNRS: Langue, culture et société dans le sous-continent indien.

URA 1063 du CNRS: SMAN, BAZIN, VANDERMEER- Centre des Religions du Japon de l'EPHE.

Centre de Documentation et d'Etudes du taoïsme de l'EPHE.

筆者は今夏フランスに立ち寄り、G. FUSSMAN, B. FRANK, C. CAILLATの三氏と会い、またL. BAZIN氏とは電話で、シンポジウムについて伺う機会があった。各氏はそれぞれにシンポジウムに対する熱意を示されたのであるが、その際、従来の計画に対する重要

な変更を幾つか示唆された。

第一は、フランス外務省が従来の日仏シンポジウムに対する財政援助を全く取り止めた以上、フランス側は、来年度の会議はこれまでの継続ではなく、新規の二国間学術会議と見なしているというものである。フランス外務省の厳しい対応については以前から側聞していたが、突然これまで15年、5回に亘って継続した日仏シンポジウムを解消するという提案には驚かざるを得なかった。

帰国後、秋山光和学術委員会委員長に確認したところ、日本としては、たとえ仏外務省の後援がなくとも従来の日仏シンポジウムの継続と考えたい意向であるとのことであった。従ってこの点に関する結論は、今後のフランスとの折衝にまたねばならない。

第二は、従来「諸地域文化への仏教の適応」というテーマを巡って写本・碑文を用いた研究を発表しあう、という了解であったが、主会場が一箇所となったため、広い視野に立った概括的研究、あるいは他分野の専門家の関心を引き得る普遍的ないしは理論的側面に関する研究の発表を要請するというものである。

第三は、C. CAILLAT 女史が参加希望を表明されたことである。

フランスに対して日本側発表者リストを渡すべき時期も近づきつつある。前回の総会后、中国学も参加の意向を表明され、これまでに参加希望者は既報の「中央アジア地域」7名、「東南アジア地域」8名に加え、「中国学」11名が新たに加わることとなった。さらに「日本学」の山折哲雄氏（国際日本文化研究センター教授）も参加されることとなった。またオブザーヴァーとして山田均氏（タイ仏教史）からも参加予定であり、総勢28名に達している。「中央アジア」「東南アジア」に関しては本誌前号に既報したので繰り返さないこととし、最近準備会を開かれた「中国学」について、ここに連絡責任者の山田利明氏に報告して頂く。また10月1日の日仏学術委員会拡大委員会の模様も報告頂く。

日仏会館学術委員会 拡大委員会

報告 山田 利明

10月1日、関連学会のシンポジウム担当者を含めて、拡大委員会として日仏会館において開かれた。東洋学会からは、福井会長が日仏会館学術委員会の一員として、山田が会長の委嘱をうけ中谷幹事の代理として出席、中谷幹事からファックスで送られてきた報告を説明した。

会議では参加10分野、数学・光化学・海洋学・地理学・法学・経済学・社会学・東洋学・計量言語学など、開催母体となる関連学会のシンポジウム担当者がそれぞれの準備状況を報告し、秋山光和学術委員長とセカルディ学長から、フランス側の対応団体の現状報告があった。全般的な状況についていえば、上記10分野の準備状況はかなり進んでおり、来秋の開催は確定的となりつつあること。今回のシンポジウムに関して、フランス外務省の援助が期待できないこと、などが話題となった。

秋山委員長によれば、今回の会議は、パリ以外の都市で行う分野も少なくなく、日時についても、一応シンポジウム期間10月初旬の2週間が基準とされるものの、その前後を予定している分野もある。しかも、これまでのような合同開会式はない様子である。そうなると、日仏シンポジウムというフレームの意味がなくなる恐れがある。こうした事態に備えるため、在パリ日本大使館主催の全分野合同のレセプションを10月初旬に実現するよう努力することであった。

「中国学」準備会

報告 山田 利明

10月5日、早稲田大隈会館において、「中国学」参加者準備会がひらかれた。出席者は、福井会長・山田・前田繁樹・宮沢正順・山田均・鹿島有希子の6名。議題は、来秋のシンポジウムについての内容の説明で、10月1日の学術委員会の内容を報告し、参加希望者の確認をおこなった。希望者は、上記6名の他に数名の会員からの申し出があり、最終的に

は11名（オブザーバー参加を含める）となる見込みである。なお「中国学」関係参加者の連絡責任者一人をおくことになり、山田利明がこれに当たることとなった。参加希望者は、正参加・オブザーバー参加の別を明記して、中谷幹事か山田まで急ぎ一報頂きたい。

報告

日仏東洋学関係者懇談会

福井 文雅

セカルディ学長になってから、東洋学が前より重視され、しばしば話題に上るようになって来た。具体的には、東洋学の今後の在り方、日仏会館と東洋学との関係、フランスの東洋学の後継者・振興策などが問題である。それで今回、ジェルネ教授の来日を好機に、セカルディ学長は在日のフランス人東洋学者に呼びかけ、日仏東洋学の未来像について、ザックバラに意見を述べ合う懇談会を開かれた。10月29日3時半から約二時間、日仏会館一階のフォワイエに以下の13人が招かれて集合した。

- Hubert CECCALDI ユベール・セカルディ
日仏会館学長、海洋学
- Robert DUQUENNE ロベール・デュケンヌ
『法實義林』研究員、佛教学
- Hubert DURT ユベール・デュルト
『法實義林』研究員、佛教学
- Jacques GERNET ジャック・ジェルネ
コレージュ・ド・フランス教授
フランス学士院会員、日本学士院客員、中国学
- François GIPOULOUX フランソワ・ジプルー
日仏会館研究員、
中国経済・日中経済比較
- Marc KALINOWSKI マルク・カリノフスキ
フランス極東学院研究員、
中国哲学・自然科学史

- Erika PESCHARD エリカ・ベジャール
日仏会館研究員、日本美術史
- Léon VANDERMEERSCH
レオン・ヴァンデルメルシュ
フランス極東学院院長、中国学
- Michel VIÉ ミッシェル・ヴィエ
フランス大使館文化部、日本学

- AKIYAMA Terukazu 秋山光和
東大名誉教授、日仏会館学術
委員会委員長、美術史

- FUKUI Fumimasa-Bunga 福井文雅
早大教授、日仏会館学術委員、
中国哲学・宗教史

- IYANAGA Shokichi 彌永昌吉
東大名誉教授、日仏会館学術
委員、数学

- TSUBOI Yoshiharu 坪井善明
北海道大学教授〔在ヴィエトナム
日本大使館〕ヴィエトナム史

- Frédéric GIRARD フレデリック・ジラルド（フランス極東学院研究員、早大・パリ大交換研究員）氏は欠席した。

その場の出席者全員に、セカルディ学長は次のような文書を配付されたので、必要箇所を訳して紹介しておきたい。

東洋学と日仏会館との関係を考えるこの懇談会のテーマを学長は *Essai de définition du rôle de la Maison franco-japonaise dans le domaine des études orientales* : (東洋学における日仏会館の役割の定義試論) とし、これを更に「= pensionnaires et formation (日仏会館研究員とその養成) = rôle des sociétés franco-japonaises (日仏諸学会の役割) = publications (刊行物) の三つに細分化している。

そして、「東洋学の分野では、フランスを知る日本人研究者の数は、日本やその他極東の諸国を知るフランス人研究者の数よりも遙かに多い。その点で、フランスと日本との間には一つの不均衡が存在している。それをかなりの程度まで平衡化することが是

非とも必要であって、そうすれば、将来にわたって、日仏間に効果ある、且つ高度の対話が確立するであろう。」「従って、東洋学、とりわけ日本研究に関係するフランスの諸機関は共同で或る計画プランを立ててそれを政府当局に提出し、日本研究を促進するようにすることが、是非とも必要である。」と述べ、従来の東洋研究がややもすると分散化の傾向にあった事実も指摘する。「現在の目標としては、1991年に向けて、或る研究集会すなわち一つの特定のコロックをフランスか日本で準備し、先ずはフランス人の間で、次いで日仏の専門家の中で数年計画の大綱を決める。」「将来どのような形の共同研究が、日本の研究者達と、日本の諸学会もしくは日仏東洋学会において、考えられるであろうか？」等々の問題を提起して、「1991年の東洋学研究集会を準備するには、以上の様々な質問に答えねばならない」としている。

但し、懇談会はこの学長提案書をめぐって進行したわけではなく、かなりアット・ランダムで自由な意見交換や会話に終始した。用語はフランス語のみ。議長は秋山光和教授で見事に捌かれたが、特に議事録が取られたわけではなく、特別な結論が出たわけでもなかった。

私は日仏東洋学会会長としての回答や意見を何回か求められたが、私個人はフランスの東洋学界の内情と日本のそれとをかなり良く知っており、従って、議論しても解決も実現もし難い問題と大方見当が付くだけに、迂闊に答えは出来なかった。実際、こう言う問題は、本学会でも、評議員会や総会に諮らなくては即答は出来兼ねるものである。

但し、日仏東洋学会に日本研究者は少ない事実は指摘しておいた。「日本研究」の促進を云々しても、フランスの日本研究に通じた日本人研究者がどれだけいるのであろうか？ 日本では日本研究を東洋學に入れたい傾向が強いことを、ヴァンデルメルシュ氏が付言された。

東洋学と言っても、実に多岐にわたる事実も指摘された。

また、幾ら日本研究の重要性を意識し強調しても、先立つものが無ければ現実には何も出来ない点を私は述べた。こういう場にしては、どうも格調高くない話で内心忸怩たるものが有ったが、机上の空論に終ることを恐れたのであった。外国の方々には日本で補助金の申請をしたり、資金集めの苦勞をしたことが無いので、この富裕日本からは想像も付かないことであろうが、人文系への日本の公私機関からの補助は、相変わらず期待薄なのが現実なのである。

幸いにも現学長は東洋学を重視してくれているが、氏の後継者もそうであるとは限るまい—と言って、学長提案の「継続」も問題に上った。

様々な意見が出たが、いずれにせよ、この種の懇談会が催されたのは初めてのことであり、東洋学会としてはセカルディ学長の問題意識、心遣いには感謝しなければなるまい。そして、もしもフランス側から、一致した意見や要望が日仏東洋学会宛てに寄せられて来たならば、我々も真剣になってそれに応えて行かねばならないであろう。

報告

学術会議に再登録

本学会が日本学術会議に始めて「学術研究団体」として登録したのは、昭和62(1987)年のことであった。関連研究連絡委員会は「東洋學研究連絡委員会」(第一部)である。そして今年度、第15期学術会議会員選出の年に当るので、再登録の手続きをとったところ、学術研究団体の登録審査基準にパスし、平成2年9月11日付けで、日本学術会議会員推薦管理会から申請が完了した旨の通知が届いた。

前回の選出の時には、本会には選出機関が存在しなかったので、学術会議会員の候補者はおろか、その推薦人すら、送ることが出来なかった。

しかし、1989年3月の京都での会員総会で、日仏交換研究員の推薦や、日仏共同研究事業の審議に当る為の「推薦委員会」が創設され、6名の委員が選

出されたので（『通信』10号17頁を参照）、この委員会を通して、今回は「推薦人」（日本学術会議会員の推薦に当る者）を出すことになった。本会が推薦人として指名し、届け出ることが出来る人数は1人である。

その結果、福井文雅会長が推薦人に推挙されたが、何らかの都合で欠席する場合の予備者には、興膳宏代表幹事が当る予定である。（F. F.）

編 集 後 記

『通信』第12号をここにお届けします。この号もご多忙にもかかわらず多くの方が記事を寄せられました。さて今年三月の総会では、新しく福井氏が会長に、興膳氏が代表幹事に選出されました。両氏の熱意あるご尽力により本会は益々発展して行くことと思います。

編集子はこの夏初めてインド、ネパールへ写本調査に行き、デリー、パトナ、カトマンズとそれぞれ一、二週間滞在しました。古文書館や、博物館を巡って、写本のコピーやマイクロフィルムを注文することを日課としましたが、その限られた日々に垣間見たインドの貧困には、驚かされました。根底にある宗教とか信条が、社会的な構造、因習となつて且つは繊細に、且つは執拗に息づいているさまに圧倒されて帰ったところです。

会員の皆様がよい新年をお迎えになり、来年もまた新地平を開く研究を創造されることをお祈りします。（H. N.）

投 稿 規 定

会員諸氏からの投稿を募ります。

できればNECのPC-98を用い、以下の設定の「一太郎」（ver.3）で入力したフロッピー、または打ち出し原稿ををお送り下さい。

用紙サイズ	: A 4	1行文字数	: 4 5
1ページ行数	: 4 1	上端マージン	: 2 3
下端マージン	: 2 7	左端マージン	: 3 2
右端マージン	: 9 0		

弁別記号など、一太郎にのらないものを含む場合は、打ち出した原稿を送っていただいた方が便利です。またお手持ちのワープロで上記設定のごとく打ち出した原稿でも結構です。

なお手書き原稿は、当方で入力致します。

日 仏 東 洋 学 会 通 信 第 1 2 号
1990 (平成 2) 年 12 月 10 日 発 行

編 集 兼 日 仏 東 洋 学 会

発 行 者 福 井 文 雅

本 部 : 〒 1 0 1 東 京 都 千 代 田 区 神 田 駿 河 台 2 - 3 日 仏 会 館 気 付

発 行 所 〒 6 7 3 神 戸 市 西 区 伊 川 谷 神 戸 学 院 大 学 中 谷 英 明 研 究 室
Tel. 078 974 1551 Fax. 078 974 5689

印 刷 所 〒 5 3 0 大 阪 市 北 区 浪 花 町 9 - 1 2 - 4 0 2 六 稜 舎 (Tel. 06 371 1681)
